人間学の探究（７）
～人間にとって「信じる」とは何か～

山　岡　政　紀

１．問題提起

人間とは，何かを「信じる」ことのできる唯一の生命体である。否，むしろ「信じなければ生きられない」と言うべきである。この「信じる」という行為，そもそも何事なのだろうか。「信じる」という動詞の意味は国語辞典では次のように記載されている[1)]。

> しん・じる【信じる】①少しの疑いも持たずにそのことが本当であると思う。「神は存在すると―」②自分の考えや判断が確実であると思う。確信する。「僕は彼がきっと来ると固く―・じて疑わない」③相手のことばや人柄に偽りがないものと思う。信用する。信頼する。「私を―・じてついてきなさい」④信仰する。信心する。～に帰依する。「仏教を篤く―」

ここには四つの語釈が記されているが，基本的に一つの語義を使用文脈によって四つに立て分けたものである。どの語釈にも「疑いを持たずに」「確実である」「偽りがない」といった事態の確実性が「思う」という主観性によって承けられている。主観性とは不確実性の異名でもある。④の信仰，信心にしても，当事者は確信をもって信仰する一方で，そこにはその真実性につい

ては万人が認め得るような客観的な把握ができないという意味において不確実性がつきまとっている。「信じる」が持つ，このある種の二面性の本質を考察することが本稿の第一の目的である。

そして，「信じる」は他の生物が為し得ない人間のみの行為であるが故に，生物としての生存に必要ではない余剰の行為であるかのような印象がある。「私は何も食べません」と言って生き続けるわけにはいかないが，「私は何も信じません」と言って生き続ける人はいくらでもいる。しかし，人間が唯一信じることのできる生物であるならば，そのことこそが人間の人間たる所以であって，それは決して周辺的な行為ではなく，人間生活の中心に位置する行為であるはずである。そのことを自覚的な方法で再確認したいというのが，本稿の第二の目的である。

結論的に言うならば，本稿ではこの「信じる」行為を「生きるということに対するコミットメントのあり方」であると定義したい。心理学を中心に学際的に使用される用語「コミットメント」（commitment）は意味の幅が広く，日本語で一つの訳語に対応させることが難しいが，「関与，自己投入，約束，宣言」などの訳語がある。これについては５以降で改めて考察する。

２．「信じる」を構成する命題とモダリティ（心的態度）

まず，基本的な整理をしておきたい。「信じる」ということは人にとって外面に表れない心的態度である。「信じる」という心的態度を発話として表明したり，祈りを捧げるなどの身体的態度として表現したりすることもできるが，それは副次的なものであって「信じる」ことにおいて必須ではない。

「信じる」という心的態度は必ず対象を必要とし，対象無しにただ「信じる」ことが単体で存在することはあり得ない。ドイツの哲学者フッサール（Edmund G. A. Husserl, 1859-1938）は，人の意識というものは世界の何事かについての意識であって，言い換えれば世界の対象や事象に向けられて初めて意識というものは成り立つと述べ，その性質を志向性（Intentionality）と

呼んだ。「信じる」という心的態度もまた，その意識の一つの状態であり，志向性を有しているが故に対象を必要とする。

「信じる」という心的態度の例が⑴である。⑴は心的態度の言語化であるが，これを心内の信念として留めることもできるし，音声または文字に表現すれば発話となって，自身の信念を他者に伝える手段ともなる。

⑴　巨人が優勝すると信じる。

言語学的に分析すれば，⑴は命題（proposition）とモダリティ（modality）とに二分できる。命題とは主述構造を骨格として世界の有様について述べる言説である。モダリティとは命題に対する話者の心的態度を指す用語である。⑴をこの二分法を用いて分析的に表示したのが⑵である。わかりやすさのため，両者の間に／を入れることにする。

⑵　巨人が優勝する　／と（私は）信じる

命題＝心的態度の対象　モダリティ＝心的態度

先ほど対象なくして心的態度が単体で存在することはあり得ないと述べたが，そのことは信じる対象のない⑶が非文であることを意味する。⑶は対象が文脈上含意されていない限り非文である。

⑶＊私は信じる。

人が「信じる」対象は，⑵に示したように必ず主述構造を有する命題の形をしている。もちろん，⑷～⑹のように，一見すると一項構造に見える場合もある。

⑷　神を信じる。

⑸　宗教を信じる。

⑹　恋人を信じる。

これらの場合も，それぞれ（4’）～（6’）のように二項構造の命題に言い換えることが可能である。

（4’）　神が存在すると信じる。

（5’）　その宗教が真実であると信じる。

（6’）　恋人が誠実であると信じる。

従って(1)の対象を名詞句に言い換えて「巨人の優勝を信じる」としても意味するものは命題の構造をしている。つまり，信じるということは直接に何らかの対象物に対して向けられるのではなく，命題という抽象的なものを志向するという点で，きわめて言語的，記号論的な心的態度と言うことができる。だから「信じる」は，言語を使用する唯一の生き物である人間においてしかなしえないのである。「信」という字も「人」べんに「言」と書く。

心的態度「信じる」は，アメリカの言語哲学者サール（John R. Searle, 1932-）が前期の発話行為論（speech act theory）から後期の心の哲学（philosophy of mind）へと転換した際のキーワードでもあるので，ここでその意義について確認しておきたい。

Searle（1969）と Searle（1979）の２冊の主著によって発話行為論を確立したサールは，３冊目の主著である Searle（1983）で，かつてフッサールが考察した志向性（Intentionality）に関する論考を発表し，研究分野を言語哲学から心の哲学に大きく転換させたと評された。しかし，この転換はサールの発話行為論にとって無関係な何らかの外在的要因によって動機付けられたものではなかった。そうではなく，それはサールの理論を構成する内在的要因からの漸進的拡張の結果であった。だから，言語哲学から心の哲学へと分野を越境した意識もサール自身にはなかったし，そもそも彼の理論をどの分野に属するものと見なすかということも他の研究者や評論家が後付けで行ったのに過ぎなかった。

発話行為論から志向性の理論への転換をもたらした内在的要因とは，適合方向（direction of fit）の理念の拡張であった。つまり，サールが発話行為論における「言葉と世界との適合方向」の理念を，「心と世界との適合方向」の理念に拡張したときに，そこにあったのが志向性の理論だった。つまり，心は常に世界を志向しており，心と世界との関係性をどう切り結ぶかという観点を抜きにして単体としての心を分析することはできないとするフッサールの立場と同じ地点に，結果としてサールは到達したのである。

具体的には Searle（1979）の第１章において，発語内行為（illocutionary

act）の分類基準の一つとして適合方向を挙げ，事実確認的な演述（assertives）系の発語内行為が「言葉を世界に適合させる」のに対し，行為志向的な対動（directives）・自告（commissives）系の発語内行為は「世界を言葉に適合させる」ものとして，両者の特徴を対比的に述べている。この段階での「心」は，発話を動機付ける話者の心的状態（psychological state）として記述されている。そして，演述（assertives）系の発語内行為における話者の心的状態とされるのが信念（belief）である。

３．演述系発話の前提となる信念

本節では，演述系の発話とその元になる心的状態としての信念との関係について，用例を用いて整理をしておきたい。(7) を発話する人は (8) の心的状態（＝信念）を有している。これ以降，発話については「　」を用いて表示することにする。

(7)「今，雨が降っている。」〔発話〕

(8)（私は）今，雨が降っていると信じる。〔心的状態（＝信念）〕

そして，(8) に対して，前節の (2) と同様の二分法を施すと (9) のように表示される。

(9) 今，雨が降っている／と（私は）信じる〔心的状態の分析〕

命題＝心的態度の対象　モダリティ＝心的態度

発話 (7) の話者が心的状態 (8) を有することを求める適切性条件が誠実性条件 (sincerity condition) である。信念は，雨が見える視覚，雨音が聞こえる聴覚，雨水を肌で感じる触覚などの知覚情報に基づくか，場合によっては屋外にいる人から得る伝聞情報に基づいても生起するものである。それは必ずしも発話に至らず，心の中に浮かぶ想念としてのみ存在することもあり得る。

また，ここで確認しておきたいのは，(7) には言語形式としては命題しか示されていないが命題とイコールではない，ということである。(7) にも (8) にも命題(10)が含まれていることは (9) の二分法にも示されている。発話 (7) と命

題⑽は形式上，同じ形をしている。

⑽　今，雨が降っている。　〔命題〕

しかし，実際の人の言語活動に命題が単独で現れるということはない。ある話者がいて，その人が(7)を発話する時には必ず(8)の心的状態が前提されるので，それは単独の客観命題⑽とは異なる。

心的状態を経ない客観命題⑽が単独で実在するとすれば，例えばこういう事例であろうか。屋外に設置された雨量計のセンサーが降雨を感知した時に自動的に「今，雨が降っている」という音声が流れる（文字が表示される）仕組みになっているとする。その音声は誰の心的態度を経ることもなく直接言語化されるものであり，しかも100％世界と一致する恒真情報だから客観命題⑽そのものと言うことができる[2)]。

要するに人の発話には目に見えないモダリティが必ずある，ということである。つまり，心的状態(8)におけるモダリティは言語化に際して背景化し，意識の水面下に沈んで，あたかも客観世界をそのまま描写する態度で，客観命題⑽と同じ形式の(7)を発話するわけである。この態度こそがフッサールが言うところの自然的態度（natural attitude）なのである。

なお，心的状態は発語内行為の種類ごとに異なる。例えば，⑾の依頼のような対動（directives）系の発話を遂行する話者の心的状態は欲求（want）である。

⑾　（AがBに）「Bさん，掃除を手伝ってくれませんか。」〔発話〕

⑿　AはBが掃除を手伝うことを欲している。　〔心的状態（＝欲求）〕

⒀　<u>Bが掃除を手伝うことを</u>／<u>Aが欲している</u>　〔心的状態の分析〕

命題＝心的態度の対象　モダリティ＝心的態度

心的態度とその対象である命題との関係性を見ると，演述（assertives）では「心を世界に適合させる」のに対し，対動（directives）では「世界を心に適合させる」のであり，両者の対比は発話行為論における「言葉と世界との適合方向」と同様の対称性を見出すことができる。しかし，発話することなしにAが⑿の欲求を心内に抱くことも可能である。

以上の内容から整理しておきたい。信念（belief）とは，世界が如何にあるかということに対して人が心に抱く心的状態である。それは存在論的な意味において世界が心に先行してア・プリオリに存在し，その世界の有様を心に映し出している状態だということである。

ここで，同じ文構造を持つ発話と心的状態の差異について確認しておきたい。

第一に，発話の真偽値と心的状態の真偽値の差異についてである。演述系の発話が言葉と世界との関係性において真偽値を有するのと同様に，心的状態である「信念」もまた世界との関係性において真偽値を有する。つまり，発話である(7)も信念である(8)も，共通して真偽値を有する，ということである。但し，その「真偽」の意味合いが異なる。

実際には雨が降っていないのに(7)と発話するのは「偽」である。これは世界と発話という，いずれも観察可能であるという意味で対称的な二者間の異同によって真偽値が決まる。いっぽう，心的状態の場合，目の錯覚による勘違いや間違った伝聞情報によって抱いた信念(8)は「偽」である。この場合の真偽値は世界と自己心内という非対称的な二者間の異同によって決まる。自己心内は他者から観察不可能であるから，世界と自己心内とは非対称的なのである。

「真」の信念を持ちながら，「偽」の発話を行うこともあり得る。つまり客観世界では雨が降っていなくて，話者がそれを認識していながら，(7)を発話したとすれば，それは誠実性条件に違反した「虚言」となる。

発話と心的状態の第二の差異はモダリティの差異である。(7)

(7)「今，雨が降っている。」〔発話〕

⒁の終助詞「よ」や⒂の態度動詞「と思う」といった発話のモダリティ形式は，それぞれに対人機能上の固有の特徴を有しており，これまでも文法研究として様々な考察がなされている（命題とモダリティとの間に／を挿入）。

⒁「今，雨が降っている／よ。」〔発話〕

⒂「今，雨が降っている／と思う。」〔発話〕

いっぽう，(7)，⒁，⒂と，その発話の前提となる心的状態とは，モダリティ形式の有無・差異がどうであれ(8)の「信念」であることは共通している。

同様に，⒃，⒄は発話のモダリティ形式が異なるが，その前提となる心的状態のモダリティは共通して⒅の「願望」である。

⒃ 「今日，雨が降って／ほしいなあ。」〔発話〕

⒄ 「今日，雨が降って／くれるといいなあ。」〔発話〕

⒅ （私は）今日，雨が降ることを望む。 〔心的状態（＝願望）〕

次節では，このように発話と心的状態との間にある，真偽値の差異とモダリティの差異，この二つの差異を念頭に置きながら，「信じる」という動詞の発話上の意味と心的状態としての意味の差異についても注目してみたい。

４．発話における「信じる」の不確実性

サールは(8)のように演述系の発語内行為の前提となる心的状態の記述に心理動詞「信じる」（believe）を用いているが，それを発話として形式化した⒆には多少の違和感がある。

(8) （私は）今，雨が降っていると信じる。 〔心的状態（＝信念）〕

⒆ ??「今，雨が降っていると信じる。」〔発話〕

(8)は雨の中を，傘を差して歩いている人が誰かに電話でその降雨状況を伝える時のような，命題の真が確実であるような場合でも，その心的状態は「信じる」（believe）によって記述される。しかし，その人は自分が感じている雨の視覚や触覚という主観経験をあくまでも客観的事実として捉えているがゆえに，その主観性は背景化され，言語化されることがない。これはまさにフッサールが言うところの自然的態度によるものであって，その結果として，発話(7)に動詞「信じる」が用いられないことは，前節でも既に述べた。

では，(1)や(4)～(6)のように「信じる」を言語化して発話するのはどのような時であろうか。(1)の段階ではそれが発話なのか信念なのか区別しなかったので，ここで再度整理しておきたい。発話⒇の前提となる心的状態は信念

㉑である。これをそのまま発話したのが㉒であり，⑳と㉒はほぼ同義の発話である。そして，発話㉒の前提となる信念もまたやはり㉑であって，この場合，発話と信念とが同形式になっている。

⑳ 「巨人が優勝する。」〔発話〕

㉑ 巨人が優勝すると信じる。 〔心的状態（＝信念）〕

㉒ 「巨人が優勝すると信じる。」〔発話〕

同様に，㉓の前提となる心的状態は信念㉔である。これはリーグの球団数が６であることや優勝球団が一つであることなどの知識を元に，当該命題「６球団のいずれかが優勝する」が真であることを認識することによって持ち得る信念である。

㉓ 「６球団のいずれかが優勝する。」〔発話〕

㉔ ６球団のいずれかが優勝すると信じる。 〔心的状態（＝信念）〕

ところが，㉔をそのまま発話した㉕は不自然な発話となる。

㉕ ??「６球団のいずれかが優勝すると信じる。」〔発話〕

実際の発話における動詞「信じる」は心的状態の信念の「信じる」よりも意味領域が狭く，このような「自明の理」を承けることができないのである。「巨人が優勝する」のように自明ではない不確実な命題であれば，モダリティ「と信じる」は背景化してもしなくても，どちらでもよかった。一方，「６球団のいずれかが優勝する」のような自明の理においては「と信じる」の背景化が義務となる。

その論理から言えば，同様に自明の理の命題を承ける㉖～㉘はどれも不自然である。

㉖ ??「明日太陽が昇ると信じる。」

㉗ ??「１＋１は２であると信じる。」

㉘ ??「人間には男と女があると信じる。」

自明の理でなければ動詞「信じる」は使っても使わなくてもどちらでもよいのだが，その真偽が自身の個人的領域で閉じているような主観的事態であることを積極的に表明したいときに動詞「信じる」を敢えて用いることもあ

り得る。㉙と㉚を比較すると，「彼が犯人ではないこと」に客観性があると思えば㉙を発話し，あくまでも個人的見解であって客観的な保証がないと言いたい時には敢えて「信じる」を言語化して㉚と言う。

㉙ 「彼は犯人じゃないよ。」

㉚ 「彼は犯人じゃないと信じるよ。」

したがって，「信じる」という動詞が発話されるのは，その事態の客観性を十分に持ち得ない（＝自分の信念を必ずしも他者が共有するとは限らない）と認識した場合に，その信念の心的態度が自然的態度によっても背景化されずに動詞「信じる」という形で表明される，ということである。

その観点から言えば㉖～㉘「～と信じる」の不自然さは，「可能性」を表すモダリティ形式「カモシレナイ」を用いた（26’）～（28’）「～かもしれない」と同じ種類の不自然さである。

（26’）??「明日太陽が昇るかもしれない。」

（27’）??「１＋１は２であるかもしれない。」

（28’）??「人間には男と女があるかもしれない。」

逆に２の（4’）～（6’）「～と信じる」は，（4”）～（6”）「～かもしれない」に置き換えられる。客観的な不確実性において「信じる」と「かもしれない」は同程度である。

（4”） 神が存在するかもしれない。

（5”） その宗教が真実であるかもしれない。

（6”） 恋人が誠実であるかもしれない。

しかし，主観的な態度において「信じる」では確実なものと見做し，「かもしれない」は不確実なまま述べている点が異なる。つまり，「かもしれない」は自分自身においても不確実であるものをそのまま不確実であると述べるのに対し，「信じる」は自分自身においては確実であるが，それが客観的には不確実であると認識する際に発話されるわけである。ここに，冒頭の辞書語釈に見られた主観的な確実性と客観的な不確実性との二面性の本質があるのである。

以上のことから，発話における「信じる」とは，他者に共有される保証のない不確実な命題を，第一人称「私」の立場において確実なものと「見做す」態度の表明であると言うことができる。この「見做し」が，後述するコミットメント（commitment）に当たる。

5．生きることへのコミットメントとしての「信じる」

ここからは，発話の前提としての信念ではなく，人間の行為全般の前提となる信念に眼を転じてみたい。

人間の生活には信じていなければなしえない行為が満ち溢れている。まず，何と言っても「食べること」である。あらゆる動物は自らが食すべき物を本能的に峻別する能力を有している。哺乳動物ならばたいてい嗅覚が，その本能を司っている。ところが，人間は嗅覚が著しく鈍く，それに変わる峻別能力を有してもおらず，自らが食すべき物を本能だけで見分けることはできない。そこで，まず一つの段階として，文化として食物を認識している。さらに，人間にとっての食物は，文明の中で人の手を介した「食品」である。加工食品はもちろんのこと，農作物にも，農薬や肥料などに人の手の介入がある。我々は，信じる心的態度なしにはこれらの食品を口にすることはできない。以前，九州地方のある特産物のある業者が食中毒事件を起こした。その直後，その業者は営業停止処分を受けたが，全く関係のない別の業者の製品までも，売上が急激に落ちたということがあった。マスコミ報道でその特産物のイメージ自体が地に落ちたからである。これは「風評被害」と呼ばれる現象である。ともかく，信じられないものは食べられないのである。そして，人々が信じるかどうかとそれ自体の安全性とは，必ずしも一致しない。つまり，「心と世界の真偽値」は常に真ではないのである。

「複数の人が一つ屋根の下で寝ること」も信じていなければできない。人は普通，夜，眠りに就くとき，玄関に鍵をかけて寝る。泥棒や変質者に侵入されては困るからだ。不特定多数の他人の中には，どんなに割合が低かろう

が，犯罪者の存在を否定できないということから，そのすべてを疑ってかからねばならないわけである。それに対して，普通，家族同士では信じてかかっている。自分の家族の中に犯罪者がいる可能性もあるのに，である。

1980 年に起き，今なお忘れられないあの金属バット殺人事件は，就寝中の両親を息子が金属バットで撲殺したという，凄惨な事件だった。あの事件の直後，乱暴な息子を持つ親はゆっくり眠れなくなったのではないだろうか。家族に対する信頼という，どちらかと言えば無自覚なものも，崩れそうになったときに初めて自覚されるものかも知れない。

「飛行機に乗ること」にしても，1985 年に起きたあの日航機の墜落事故の直後は乗客がガタッと減った。飛行機が「信じられなく」なったからだが，裏を返せば，通常は「信じて」乗っている証拠である。

その他，「薬を飲むこと」，「結婚すること」などなど，信じていなければなしえない事柄は，人間の生活に満ちあふれている。

これに対して，動物は信じることも疑うこともしない。ただ，ありのままにそのままに生きている。人間だって，赤ん坊のうちはそうである。母親の乳を吸うときに，毒が混じってないかなどと疑う赤ん坊はいない。人間は理性とともに疑うことを覚える。疑いがあるからこそ，「信じる」という行為が発生するのだ。

要するに，人間は本能ではなく理性によって行動することを覚えた。それでも，すべてを理性で覆い尽くすことはできない。本能が担っていたすべての領域を理性で取って換えることはできないのだ。そのとき，人間は「信じる」ことなしには生きられなくなったのだ。

人間の世界は自然の摂理からはみ出て恣意的に構築された文化的要素に満ちている。「信じる」ということは，そうした文化的世界で自身が生きていくための基準を自ら設けるということだとも言える。

こうしてみると，「明日雨が降ること」という，生きることにさほど関係の無いと思われる命題であっても，それを「信じる」と言うときに，その命題がその人自身の生に対して何らかの意味ある自己投入を行っていること

が，そこから読み取れるのである。この自己投入が心理学の用語でもあるコミットメント（commitment）[3]の一つの意味である。食べ物を信じるにしても，乗り物を信じるにしても，その安全さに人間がコミットしているわけである。

ましてや，宗教を信じるというのは，信じるその人自身の，存在の意義付けであり，生きることの上で，極めて重要なコミットメントをなすことになる。

世界自体が，信じることのできるものかどうか，人間というものそのものが信じてよいものなのか，言い換えれば，人間にとって，この世界や人間自身が，正の存在か否の存在か（楽しむために存在するのか苦しむために存在するのか），これらの思索はそれ自体で既に一種の宗教的な態度である。

また，人間の社会をより複雑にしているのは，人間が人間を信じるという行為である。誰しも生きていく上では，家族や友人を信じて生きている。商売上の取引においても相手を信じるはずである。まして恋愛においてはなおさらであろう。人間だけが人を騙すことができる。欺くことができる。だからこそ逆に人は人を信じないでは生きていけないのである。人間以外の自然界の動植物には「信じる」に該当する行為は必要ないだろう。自然界の秩序はそれ自体が完璧だからである。それは人を騙したり，嘘をついたりしない。

結局のところ，人間は理性を獲得したことで，人間以外の生物から全く隔絶する生活様式を獲得したわけだが，それでいてその理性が非常に限定的で不確実なものであることに直面させられているのである。その不確実さを埋める人間の主体的行為が「信じる」であると言えるだろう。

６．宗教の信仰と科学信仰

現代の日本人にしばしば見られる傾向だが，無神論者，また無宗教主義者とでも言うべき人々が，その自分の立場を恥じることなく堂々と主張するという姿をよく見かける。一方，欧米では履歴書に Religion（宗教）を記す欄

があり，そこにはChristian，Muslim，あるいはBuddhist等と何らかの宗教を記すのが普通で，Nothing（無宗教）などと記すならば，人格異常者か特殊な思想の持ち主と訝られる。しかし，日本人にはどこかに宗教蔑視の風潮があり，信仰の表明を恥じたり，蔑視したりする傾向がある。

それは同時に，何かを「信じる」という態度そのものへの不安の裏返しかも知れない。近代科学を生み出した精神的土壌に関与することなく，ただ科学技術文明の恩恵だけに浴してきた日本人にとって，「疑ってかかる」ことによって成立する科学と，「信じてかかる」ことによって成り立つ宗教とは，いかにも対局に位置するように思われるのだろう。この宗教＝非科学的という図式は果して正しいのだろうか。

先に，次のような見解を披露した。「人間が本能を失い，かつ知能を持つことによって，その生活の中に，様々な『不確実なもの』が生じた。そして，『信じる』とは，その『不確実なもの』を主体的に『確実なもの』とみなす行為であり，従って，人間は本質的に『信じる』ことなしには生きていけない生き物である」と。

人間は科学が進歩すればするほど，「不確実」だったものが「確実」になっていくプロセスというものを経験した。そして，それによって宗教の分野に属していると思われたものが，実は科学の対象として「確かめられ」てしまい，「信じる」必要のないものであることが判明するということも経験した。

例えば，非文明圏においても，多くの民族が，嵐や山火事や干ばつといった自然の脅威に対し，その背後に「神」なる存在を想定し，祈りや生け贄を捧げるなどの方法で解決を求めた。雷にしても，日蝕にしても，不可解なものに対しては宗教的な意義付けというものを行うのが常であった。

キリスト教のような，いわゆる高等宗教であっても，この素晴らしい世界や人間という大きな秩序を生み出したものへの畏敬の念が，そのまま「神」なるものへの畏敬の念として表現された。

それらはいずれも科学の進歩とともに，その実態を明らかにされた。太陽が恒星であることも，雷が電気であることも，人間が下等生物から長い時間

を経て進化したものであることも，科学によって明らかになった。そして，そのような科学の延長線上に，すべての神秘が科学によってその実態を白日のもとに曝され，すべての神がその存在意義を失う日が来ることを人々は予想したのである。

しかし，その予想は，科学と宗教の関係に関する誤解の上に成り立っていたと言ってよい。欧米では，古くから現在に至る多くの科学者たちが，敬虔な信仰者であることは事実である。村上陽一郎氏が述べているように，もともと，ニュートン，ケプラー，コペルニクスといった，通常，宗教の対局に位置すると思われがちな科学者達も，敬虔なクリスチャンであったことは史実なのだ。

しかも彼らの内面において矛盾はなかった。彼らにおける信仰は，世界の現象を記述したり説明したりするためのものではなく，それらがおのれに対して持つ「意味」を神に見いだそうとしているのである。山火事が発生する自然のメカニズムと，それにたまたま遭遇した「私」にとっての「意味」とは，全く別次元の事柄であり，後者は科学がいかに進歩しようとも，それに関わりなく，「不確実」であり続ける分野なのである。

さらに，高等宗教の一つである仏法が解き明かそうとする対象領域は，世界の現象ではなく，もっぱら生命の不思議に対するものであった。それこそ，生命の「意味」であり，自己自身そのものであった。この分野に関しては，デカルト的二元論に支えられた近代科学においては，全く対象外の問題である。従って，その不確実さは科学の進歩した今日も全く減少することなく依然として存在し続けている。そして，それは永遠に，「信じる」ことなしには迫り得ない不可思議の領域なのである。

一方，おもしろいことに，「信じる」ということに対して否定的な無宗教主義者が，実際には科学を「信じて」いるという事実も見逃すことはできない。

我々は義務教育以来，科学を学びながら成長するが，教科書に書かれていることを疑ってかかった上で，一つ一つ自分の目で確認して，それが正しいことを認識するわけでは決してない。我々の多くは「科学者」が成した仕事

を「信じて」いるに過ぎない。例えば我々は,「地球は丸い」という事実をおのれの目でしかと確かめる方法は，宇宙飛行士ならいざ知らず，容易には持ち合わせていないはずである。歴史の教科書には諸説ある中でも史料をもとに定説とされていることが記されている。その一つ一つを疑ってかかり，確かめてまわるようなことは誰だってしないし，学習者にそういう態度は求められてはいない。学会で新しく発表される学説にしても，その学説の確立過程をいちいち検証しなおすことなどできるわけがない。しかし，複数の学者によって検証されたのち，権威ある学会で認められたものは,「確実な事実」として人々に受け入れられていく。

考えてみれば，科学に対してのみではない。新聞の報道ですら，新聞社の権威に頼って「信じて」いるわけで，自分自身でそれらを検証するなどということはないはずである。仮の話だが，新聞社各社が合議してデタラメな情報を流せば，我々はたやすく洗脳され得るのである。

したがって,「私は何も信じません」などと言い張ったり，自分は中立であるとして，何らかの立場をとることを否定して生きたりするのは実は誤謬であり，欺瞞なのである。

信じられるのは自分自身だけだと言うのもおかしい。だれしも子供の頃のような真っ白な人格であることはないわけで，読んだ本や出会った人や，観たテレビ番組や習った先生や，様々な人や思想の影響のもとに，自分の考え方を確立しているはずであり，自分を信じるというならば，それは自分を確立させたそれらの他者を信じることを意味する。ゆえに，純粋に自分自身だけを信じるということも成立し得ない。

要するに，人々よ，驕ることなかれ，ということである。我々が科学によって知り得たことは，宇宙の真理全体からみればほんのごくわずかのことに過ぎない。ましてや,「私」なる存在の意味や根拠を真摯に問うならば，我々が「信じる」ことなしに生きていくことが可能だなどとは逆立ちしても言えないはずである。謙虚に，おのれの深層から響いてくる，数式には書き表せない声に耳を傾けていくこと。それが古来真摯に探求され，深化してきた実

践的態度であり，それを我々は高等宗教と呼んでいるのであろう。

７．信じることの能動性と力強さ

日本人の宗教観の別のある側面は，信仰を一種の「気休め」と考える考え方である。たとえ，真実でなくてもそう思うことで気が休まるなら，それにも一分の利用価値はあるという考え方である。神社で「合格祈願」を祈ったところで本当に合格するかどうかとは何ら関係がないとわかっているが，その祈願行為がある種の緊張感を落ち着かせる効果があるとするものである。しかし，これもまた，宗教を本来語るべきでない領域で宗教を語り，その価値を低く貶めようとする誤謬が含まれていることは，前節までの議論で既に明らかであろう。ここでの「信じる」には何ら力強さを感じない。

一方,「信じる」行為によってしか到達し得ない精神領域の価値について「信じる」ときには，人間は大なり小なりエネルギーを要するもので，それが信仰の実践的態度として表現される場合には特に顕著である。ただの「気休め」というような消極的なものではありえず，勇気や確信に満ちていてこそ実践の継続と深化がある。そして，そのエネルギーが人々に還元されて，よりよい善なる生き方として昇華されていくならば，そこに宗教の存在意義があるのではないだろうか。

少々，観点を変えてみよう。「信じる」という言葉には，どういうわけか心を熱くさせる響きがある。２の用例⑹「恋人を信じる」を発話するとき，人なら誰でも一度や二度は経験したことのあるあふれる思いがだぶってくるものである。４では用例⒆を不自然だと述べたが,「明日，雨が降ると信じる」とすれば，なにがしかの理由においてそのことを，心を熱くして真剣に祈る姿が見えてくる。

だから,「信じる」ことがこれまでも多くの文学作品の題材となってきた。例えば，人間不信の谷底からの脱却を願って記された，太宰治の『走れメロス』。この小説で語られるのは人間同士の信頼の不確実さであり，そしてそ

れを超える正義への憧憬であった。

王である暴君ディオニスは言う。「人間は，もともと私欲のかたまりさ」と。「口では，どんな清らかな事でも言える。わしには，人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ」。王がそれまでに見てきた人々の心の中の「忠誠」と「私欲」の葛藤。そして，それと戦いながら走り続けたメロス自身の「友情」と「保身」の葛藤。そして，走って，走って，走り続けてとうとう走れなくなってしまった時のメロスの心に，その葛藤が集中的に去来する。絶望感，自己正当化，結果のすり替え，自己否定，そして開き直り。

最終的にメロスはこの葛藤を乗り越えて再び走り，遂に親友を待ち続けたセリヌンティウスと熱い抱擁を交わす。そして，王の人間不信を超克して物語は終わる。

ここで太宰は決して，人間の純粋さ，誠実さというものの不確実さを超克して確実なものとして描こうとしたのではなく，それはもとより不確実なものなのであって，だからこそそれに向かう人の「信じる」行為が強い力を引き出し，生きることの尊厳をそこにもたらすことを描きたかったのではないだろうか。

このような「信じる」行為の能動性と力強さが必然的に感動をもたらすのは，自らが「生きる」ことへのコミットメント（commitment）のエネルギーがそうさせるのであろう。

要するに，それが為されることが決して自明ではない行為を意志表明するということがここでのコミットメントの意味である。そして，そこにはおのずから主体の意志の力というものが働く。それは人と行為を結びつける力であり，その観点からの訳語としてはやはり「自己投入する」，「立場を取る」といった訳語が適していると言えよう。そしてこのコミットメントは必ず勇気や決断を伴うがゆえにエネルギーを必要とする。まさに，人間にとって「信じる」ことは「生きる」エネルギーそのものなのである。

完全に安全が保証された行為は勇気，決断を必要としない。しかし，不確実な未来に対して，そこに人間の主体的な意志において，それを確実なもの

と見做す行為が行われるときの勇気と決断。そこには心を熱くするものが生み出される。客観的には10パーセントに満たない不確実な事柄を，自分の意志において100パーセントにみなしていくためには，むしろ1000パーセントのパワーが必要かもしれない。気まぐれで先の見えにくい男性を恋人に持った女性ほど，彼を信じることのエネルギーは人一倍強烈に持つものであろう。

そしてそれが裏切られることなく守られたときの感動。我々はそのとき，なぜ自分が生きることができるのかを強烈に見つめさせられる。信仰者が情熱にあふれた生き方を可能にするのは，第一にはその信じること自体のエネルギーから来ているのだろう。

人は疑ったままでは生きていけない。生きていくために信じる。だから人間は信じて生きることを恥じてはいけない。むしろ誇りに思うべきである。大切なことは何をどう信じるかである。

８．結語

本稿では人間を特徴付ける一つの要素として，「信じる」という主体的・能動的行為について探究した。

物心二元論的な表現を用いて言えば，客観的な物質の世界は疑ってかかって真実を見極めるべき領域であり，主観的な精神の世界は信じることによって真実に到達する領域であるという立て分けができる。後者の領域を探求し，深化する宗教は未来永遠に人類の精神の便（よすが）として必要でありつづけ，価値を創造しつづけるであろう。

以上は抽象的な論議だが，人類の歴史の事実に目を向けてみれば，時に宗教が政治の道具として利用され，信じさせることによって人心を動かしてきた。宗教が国家主義や帝国主義の手段と堕するとき，そのような欺瞞が生まれる。国家や体制の正しさは絶対的真ではあり得ず，客観的な疑ってかかるべき領域の問題である。宗教が目を向け，人が信じ保ちつづける価値は「生

命の尊厳」であり，それは主観的な精神世界にこそある。その領域の立て分けが適切になされるならば，人々は「信じる」ことによってむしろ「生命の尊厳」を守るために国家主義の欺瞞と対峙するエネルギーを手にするはずである。そして，「生命の尊厳」を脅かす負のエネルギーと戦い，自己の生命と他者の生命を守り抜き，その価値を最大限に創造しゆくには，「生命の尊厳」を「信じる」力，コミットメントが不可欠ではないだろうか。

注

1）北原保雄編『明鏡国語辞典第二版』大修館書店，2010 年刊より。語釈ごとに一用例を記載した。

2）もっとも，これも機械を作成した人間の意思が表現されていると見れば純粋な⑽ではありえないのではあるが。

3）コミットメント（commitment）は経営学や心理学など学際的に用いられる汎用的用語で，その訳語は，約束，誓約，自己投入，関与，介入など多様である。なおかつアメリカの言語哲学者サールが自分自身の未来の行為を予告的に述べる発話行為を範疇化した Comissives の語源ともなっている。山岡他（2010）ではこれを「自告」と訳している。

参考文献

村上陽一郎（1976）『近代科学と聖俗革命』新曜社

村上陽一郎（1986）『「科学的」って何だろう』ダイヤモンド社

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』明治書院

Husserl, Edmund (1928) *Logische Untersuchungen Zwiter Band 1. Teil*, Max Niemeyer.（邦訳：立松弘孝・松井良和・赤松宏訳（1928）『論理学研究２』みすず書房）

Searle, J.R. (1969) *Speech acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge University Press.（邦訳：坂本百大・土屋俊訳（1986）『言語行為』勁草書房）

Searle, J.R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech act*, Cambridge University Press.（邦訳：山田友幸監訳（2006）『表現と意味』誠信書房）

Searle, J.R. (1983) *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge University Press.（邦訳：坂本百大監訳（1997）『志向性』誠信書房）

（やまおか・まさき，本学教授）